

今日の福音のみことばは、私たちに何を語ろうしているのでしょうか。私たちはこのみことばをどのように受け止めてきたのでしょうか。一見すると、今日のみことばによってイエスは、人から招待された時の心構えと、人を招待する時の心構えを論しておられるように思えます。けれども、私たちが信じているイエスは、それだけのことを私たちに教えようとしておられるのでしょうか。招待されたときには末席に着きなさいという勧めは、「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」という結びのことばによって、単に社交上の礼儀作法を教えておられるのではないことが分かります。宴会を催す時には、あなたたちを招くことが出来る人たちではなく、そのような返礼が出来ない人たちを招きなさいという勧めも、社会的な儀礼を超えています。

福音書の中には、神の国あるいは天の国を宴会の席にたとえたイエスのみことばが様々な文脈の中で伝えられています。先週のミサの中で聴いた「狭い戸口がから入るように努めなさい。」というみことばの最後にも、その戸口が閉ざされてしまった後では、「あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブや全ての預言者が神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ざしりする。」という警告のみことばの後で、次のように語られていました。「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国の宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になるものがある。」今日の福音のみことばも、このような神の国の宴席に招かれている私たちへのみことばとして受け止めたらどうでしょうか。

今日の福音のみことばにおいても、「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。」とイエスは言われています。このみことばをどのように受け止めたらよいのでしょうか。イエスが私たちに示してくださった神の国の宴席には招かれている人が実に多いのです。「人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国の宴席に着く。」とイエスは言われています。自分たちだけが先を争うようにして宴会の席に着いて満足してしまっているとしたら、本当には、イエスが私たちを招こうとしておられる神の国に招かれた豊かな喜びを知ることが出来ないのです。むしろ、入り口近くの末席にいて、招かれて後から入ってくる人たちに席を譲って迎え入れることによって、私たちは神の国の豊かさを本当に知ることが出来るのです。神が招いてくださる神の国の宴の本当の喜びは、

神の招きの廣大無辺さを、互いに喜び合うことの中にあるのだと、今日もイエスはここに集う私たちに語り聴かせていてくださるのです。今日も私たちはこの日曜日のミサの場集って、こうしてお互いに顔を合わせる事が出来たことを嬉しく思っています。最近お見えになっていない方の事を思いやる心が私たちの中にもあります。もっともっと沢山の方がミサにお出でになったらと思っています。このような私たちの心を私たちの主イエスが清めてくださることを祈り求めたいと思います。私たちのこのような心は、復活されたイエスが弟子たちに託し、弟子たちから始まった私たちの教会に受け継がれてきたイエスご自身の思いに繋がっていることに気付かせていただきたいと思います。イエスはその生涯をささげ、神の招きの無条件の豊かな広がり人々が気付くことを願われたのです。私たち人間の思いが狭めてしまった神の国の入り口を、全ての人のために大きく押し開くために、イエスは十字架に架かって、私たちの門となってくださったのです。イエスの十字架こそが全ての人を神の国に招き入れようとしておられる神の招きへの入り口となったのです。神自らが私たち人間の不条理な世界に私たちと同じ人間となられて、その不条理の全てを一身に背負って十字架の上にそのいのちをささげてくださいましたことよって、この不条理な世界を終わらせる神の国の新たな世界を開いてくださったのです。どのような人間の憎悪や恐れをも鎮めることのできる神の愛の世界を開いてくださったのです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」これが、私たちを神の国の至福の宴に招く招きのみことばです。私たちが生きるこの世界の不条理を一身に背負って十字架の上にその生涯を終えられたイエス・キリストが、その死よって開かれた神の国の至福の宴の席から私たちを招いておられる招きのみことばです。イエスの十字架の前に身を投げ出して、私たちの心のうちに湧き起こってくる全ての思いを鎮める事が出来る時、私たちは自分が神の国の喜びに包まれることを真実感じ取ることが出来る時でしょう。普段気にも留めないで素通りしているかも知れないイエスの十字架の前に、心を鎮めて祈ることが出来る時、私たちは十字架の上から招いておられるイエスの神の国の喜びに満ちた招きの御声を聴く事が出来る時でしょう。そのようにして、今日も神の国の門であるイエスは、私たちをイエスがそこにいてくださる、神の国の至福の宴へと全ての私たちを招いていてくださるのです。

「宴会を催すときには、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」という今日の福音の勧めは、この後に続く、ルカ福音書 14 章 15 節から語られている、もう一つの神の国を宴会にたとえたみことばに結ばれています。「神の国で食事をする人はなんと幸いでしょう。」イエス

のみことばを聴いてこのような感想を洩らした人に語られたみことばがそこには伝えられています。

大勢の人たちを招いて盛大な宴会を催そうとした家の主人が、準備万端整えて招いておいた人たちのところに使いを出すと、その人たちは皆次々に、自分たちの都合を口実に招待を断ってきたのです。それを聞いた主人は怒って、僕たちに言います。「急いで町の広場や路地に行って、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れてきなさい。」僕たちが「ご主人様、仰せのとおりにしましたが、まだ席があります。」と伝えると、主人は、「通りや小道に出て行って、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。言うておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。」と言ったとイエスは語られています。これが、神の国の福音へと人々を招いておられるイエスの御心です。イエスの目には、父なる神がイエスを遣わすことによって整えていく神の国の喜びの宴会の大広間がありありと見えているのです。そこに全ての人を招き入れるためにイエスは私たちの世界に来てくださったのです。貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人たちが真っ先にそこに招き入れられるのは、その人たちが、この人間の世界の理不尽さに最も敏感であらざるをえないからです。招かれていた人々が、せつかくの招待を次々に断ってしまったのは、その人々は、自分たちが作り出しているこの世界の理不尽さに、その生き方によって全く鈍感になってしまっているからです。その人たちが、イエスによってもたらされた神の国の宴席への招待を断ってしまっていることが、その人たちの理不尽な生き方を示していると言えるのではないのでしょうか。こうして、イエスが私たちを招いてくださる神の国の宴席では、後の人が先になり、先の人になるのです。

このように受け止めた今日の福音のみことばは、私たちにどのような生き方を指し示すのでしょうか。ここに集う私たちは、イエスが他の箇所で言われておられるように、無邪気な子供のようになって、イエスがそのみことばによって今日も私たちを招いておられる神の国の全てを受け入れさせていただきたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池 好高